

# ボブの親指 —— 『フロス河の水車場』における投資

谷田 恵司

(平成 14 年 10 月 3 日受理)

## Bob's Thumb: Investment in *The Mill on the Floss*

YATA, Keiji

(Received on October 3, 2002)

キーワード：ジョージ・エリオット，フロス河の水車場，投資，ボブ・ジェイキン

Key words : George Eliot, The Mill on the Floss, investment, Bob Jakin

### I

ジョージ・エリオットの『フロス河の水車場』(1860)は従来から、個人の情熱と社会規範の対立という問題を、一人の女性の生き方を軸に探る教養小説的側面を中心に読まれることが多かった作品である。また、マギーが社会規範に背いたと見なされ孤立するストーリーは、妻帯者との公然とした同棲という生き方を選び、社会から異端者と見なされていた作者自身の意識が反映しているという指摘もある。<sup>1)</sup>

こうした個人と社会規範との対立という問題を、マギーの精神的成長の過程に見ようとする解釈はすでに様々な形で提出されている。一方『フロス河の水車場』は、アラン・ミンツが述べているように、「プロテスタント的職業観にともなって生まれたものであるとヴェーパーが見なした厳格な経済倫理が、情緒や想像力に取って代わってゆく様子を検討したものである」<sup>2)</sup>と、まったく別の観点から読むこともできる作品である。本論では主人公マギーを中心とした教養小説的解釈とは角度を変えて、本作品における個人と社会との関係を、特に作品中の「投資」などの経済的行為を中心にして、エリオットの他の作品中の人物との比較検討も交えて考察してみたい。

19世紀初頭の急速に変貌しつつある社会の中で、経済倫理と個人の情緒とがどのような関係を持っているか、個人はどのように社会に対応していくのか。そうした中で、金銭や職業というものは個人の生活とそれをとりまく社会とが相互に関係しあう境界面の一つである。ある

登場人物がどのような経済活動をおこなっているかを考察すれば、その人物が社会とどう関わっているかを判断する一つの材料を得られるであろう。ここでは作品の登場人物の中でとりわけボブ・ジェイキンを中心に考えてみたい。ボブは作品のストーリー展開の上では主要な人物というわけではない。しかし彼は個人的情熱と社会規範との関係において一定の調和を具現化している人物であるように思われる。彼の経済的活動をまず検討することから出発して、それを他の人物たちの場合と比較することで、彼らが近代資本主義社会の発展の中でいかなる位置にいるのかが明らかになる。そうした作業を通じて、そのような経済人としての人物像が、この作品の提起する社会と個人との関係という問題にどう関係しているかを考察してみたい。

### II

まず初めにボブ・ジェイキンという人物像とその社会的立場とを確認しておこう。彼が初めて作品に登場するのは幼いトムとの遊び友達の「いたざらっ子」<sup>3)</sup>としてである。「いつでもこちらが上手に出てまさつかえない目下のもの」(101)であると紹介されているように、彼は明らかにトムよりも貧しく社会階層も下である。しかしこの悪戯坊主は「あらゆる地蜂の巣を見つけたし、あらゆる種類のおとしわなをかけることができた」(101)という、いわば野生児のような生活力がある子どもであった。彼はその後、作品中に断続的に現われ、トムとマギーの人生を横切ることになるが、その都度職業を変え、次第により多くの収入を得るようになっていく。それをまとめて見ると以下のようなことになる。

最初の仕事は、読者が知り得る限りにおいては、畑の穀物から鳥を追い払う少年時代の労働だったようである。語り手はこう彼を紹介する。「このいたずらっ子は、鳥嚇しという天下公認の役目を一時中止して、今トムのお供をしているのであった——もっとも、生まれつきの鳥嚇しの役目まで放棄したのではなからうが」(100-101)<sup>4)</sup>。

次に彼は4年後にマギーとトムのところに現れてこう語る。「ごらんの通りわしはこの二年ちゅうもの、はしげに乗っていました——まあ、それで食っていたというわけで——あいまあいまにヤトリーの水車場で炉の火焚きをしてきましたが、そうでねえときにゃね」(325)。そして彼はその水車場の火事をたまたまうまく消し止めて、持ち主から金貨十枚という礼金を得る。ボブは幼なじみのトムが経済的に困窮しているのを聞き、この金を差し出すためにやってきたのであるが受け取ってもらえず、かわりにそれを元手にして布の行商を始める。水車場の火事は確かに偶然の事故ではあるが、それをボブがうまく消し止めることができたという事実は彼の行動力を示すものであろう。彼自身が語るように「種銭を、みんな自分の抜け目なさで稼ぎ出した」(417)というわけで、単に偶然の幸運だけでなく彼自身の行動力が彼の本格的職業人生の出発に寄与したのである。さらにまたその金を彼がまず最初は経済活動ではなく、友情という、金銭的尺度では評価できない精神的目的のために使おうとした事も確認しておきたい。

行商人として彼はかなり商売が上手であったようである。後に彼は元手を大きくして、トムに投資話を持ちかけ、有利な取引に誘うまでになったのだから。最後に読者が彼の消息を知る時には、彼は新しく手に入れた家に妻と赤ん坊と自分の母親を住ませ、その家は行く当てのなくなったマギーをしばらく泊めてあげるだけの余裕があり、さらには二艘の小舟まで自分のものとして持っているようにまでなる。

一体彼のこの経済的成功の秘訣は何であろうか。もちろんこの小説の設定されている十九世紀前半のイギリスの急速な経済的發展という要因も背景にはあるわけではあるが、そうした時代の流れに乗ってだんだんと商売を大きくしていった彼の(俗世間的な意味での)「頭の良さ」が最も重要な要因であろうか。ボブは商売の「こつ」を知っていたのである。しかしながら、その「こつ」は道徳的問題を含んでいた。

この作品ではボブをめぐって「だます」「cheat」とい

う言葉が三つの場面で使われている。まず最初はトムとボブが幼い頃、二人がボブのコインを投げて表か裏かで賭をする時である。トムが「裏だ」と言って勝ち、コインを要求するとボブは「表だったよ」(104)と言い、それを相手に渡さない。怒ったトムはこうボブに言う。(訳文ではこの“cheat”という単語がいくつかの日本語に当てはめられているため、その単語が出てくる部分のみ原文を日本語訳の後に併記する。以下同様。)

「銅貨はそこにほっとくがいいさ。僕あ、君の半ペニーなんか欲しくないんだ。はじめっから欲しかなかったんだ。だけど、君は僕をだまそうとした。僕はだますなんてことはきらいだ。“But you wanted to cheat: I hate a cheat.”もう君とはいっしょに行かないから」

これに対してボブはこう応答する。

「じゃ勝手にするがいいさ。おらこれからでも嘘つきたきゃいくらでもつくね、そうしなきゃ遊びごとはおもしろかねえんだもの。“I shall cheat if I like — there’s no fun i’ playing, else.”」(105)

こうしてボブはトムと仲違いし、彼にもらったお気に入りのナイフさえトムの足下に投げつけてしまう。しかしボブはトムが立ち去った後でこっそりそれをまた拾い上げる。

次に我々がこの言葉を耳にするのは前述のように、4年の歳月を経て、ボブが没落したタリヴァー家を突然訪ねてきた時である。彼はトムが自分を思い出してくれないとわかると、子どもの時にトムにもらったナイフを取り出して示す。

「それから、ほら、この小さな方の刃はかけましたよ、だがわしは新しい刃はつけさせないんです。やつらわしを欺して“they might be cheatin’ me”ほかのナイフとすりけえちまうでしょうからねえ、なにしろ田舎にゃこんな刃はないですからなあ」(323)

彼はもちろん相手にもらったナイフを自分がいかに大

切にしてきたかを語っているわけであり、幼い日の友情を忘れてはいないと言っている。それをトム側から見れば結果的に、彼は友人にナイフをあげるという投資を幼いころに行っていたと言えるだろう。その投資が、今になって経済的困窮に直面したときに、その友人が援助を申し出るという形で回収されるのである。

しかしまた同時に、この発言からはボブの道徳観も窺うことができよう。彼はナイフの修理を依頼したら自分をだますかもしれない職人を道徳的に非難しているのではない。商売においては、自分がずるをするのと同様に他人もまた自分をだますだろうということを当然のこととして想定し、それを避けるのが社会生活の上でのいわば当然の知恵であると言っているのである。そんな彼が、けんか別れした昔の友人が経済的に困窮していると聞きつけ、火事を消し止めてもらった報償金を差し出そうとする。ここでは、商売上の倫理と友情とは明確に分離されている。

まず、ここには商売はいわばだますことである、という素朴な経済観がある。安く買って高く売る、それこそが商業であるという考えである。商人が品物を仕入れて、そこに利潤を上乗せして小売りする場合、その商品に新たな価値は物理的に目に見える形で付け加えられてはいない。それゆえ、商品流通を担う商業の役割は、目に見える形で商品生産を担当する製造業に比べて相対的に低い評価しか与えられていなかった。

そうした状況の中で、商業に従事するディーン氏はトムにこう力説するのである。

「麦の穂が先にゃ一つきりしか出なかったところにへ二つつくれるとなれば、こりゃ大したことさ。しかし、おまえさん、物資の交易を促進して、穀物を空腹な人たちの口にいれてやるということも、また大したことだ。それがわしらのしている仕事だ。この仕事に関係することは、一人前の男の職業として、立派なものだ、とわしは思うんだが」  
(507 - 508)

この言葉は、産業化・工業化の進む時代において、流通の重要性を指摘し、商業の存在理由を宣言するものとして、注目に値する。

“cheat”という言葉が三度目に使われるのは、ボブがマギーに本を持ってきてくれる場面である。彼女と話し

ているうちに、ボブは自分がどうやって商売物のフランネルの長さを測るかをつい口にしてしまう。

「このことでさあ、お嬢っちゃん」とボブは言っていて、親指という、人間と猿との差別を示すものの人並はずれて太い見本を、すばやく出して見せた。「フランネルの寸法をはかるときにですなあ、こいつがものをいうんで、わしや、フランネルの行商をしています、こいつは背負うのに軽いし、金目がのすんで、ところで、この太い親指がものをいうんですよ。わしや、物差の端に親指をあてます、そして指のこっちがわを切るんでさあ、婆さんたちやそれに気づかないんですぜ」  
「でもボブ、それじゃひとを瞞すことじゃないの。“That’s cheating.”わたし、あんたの口からそんなこときくの厭だわ」とマギーはまがおで言った。(377)

ボブはそう言われても自分がひどく悪いことをしているという意識はない。

「もっとも、相手は値切るだけ値切って二束三文でフランネルを買いたいようなけちんぼう婆さんどものときですが、わしがその金でおまんま食べてることなんか考えてもみない女どもですよ。わしは、わしを瞞そうとする人でなければ誰とこだって瞞しはしないんで、お嬢っちゃん、— どんなんもんですえ、わしや、これでも正直者でさあ、ほんですよ・・・。」(377)

しかし彼は結局マギーに言われたことを気にかけて、別れ際に「このでっかい親指でずるいことするのはやめします」(377)と約束する。

### III

そうしたボブの内面を語り手は特に読者に示すことはない。彼の内面的生活が彼の社会的生活、つまり行商人としてのあり方と特に矛盾していないことは明らかである。彼の精神面において唯一明確なのは、彼がトムを大切な友人と見なし、その妹のマギーを崇拜していることである。マギーへの感情を彼は特に隠し立てはしない。彼はマギーが大切にしていた本を売り払わなければなら

なかったと聞いて、彼女に本を贈り、また、後には結婚して最初に生まれた娘にマギーの名を付けることまでする。そしてスティーンとの件で家に戻れなくなった彼女を自宅に受け入れる。しかし彼のマギーへの思いは幼なじみの友達の妹への一方的敬慕・崇拝であり、そこには性的な要素は含まれず、葛藤は生じない。

ボブはマギーやトムとの関係においては「ずる」をせず、正直であるが、それはあくまで個人的関係においてのことである。商売において正直であるかどうかは、彼自身の「わしゃ、これでも正直者でさあ」(377)という言葉にもかかわらず、疑問が残る。確かに彼はマギーにはっきりと言ったように「でっかい親指でずるいことするのはやめに」したのだろうが、親指のかわりに口先で「ずる」をするのは続けていたようである。

ボブとグレッグ夫人とのやり取りの場面を見てみよう。彼がマギーに、もうずるはしない、と約束した後のことである。ここではしっかり者のグレッグ夫人よりもボブの方が一枚も二枚も上手である。ボブは「一目で、グレッグ夫人は追いつめて捕らえたなら損にはならない獲物だと見てとった」(413)。彼は「ほかのやつならこの品でいい加減儲けるでしょう、ところが、わしときたら・・・まったくの話が、わしゃ、買値とあんまり変わらない値で商売をしますよ」(417)などと言いながらも、傷物のモスリンの10シリングという当初の値段をいっさい下げない。グレッグ夫人は最初6シリングと提示し、次に7、さらに8シリングまで値を上げ、何とかその値段で買い取ろうとするが、ボブは巧みに話をそらして値引きに応じない。結局、夫人はボブの言い値が5シリング8ペンスであった網織物と合わせて「さあ、ふた品で15シリングだよ。だけどとんでもない値だねえ」(421)と言って買い込むのである。

二品でボブはたった8ペンス値引きしただけである。それも、ボブによれば、二つ目の品の網織物は、そもそも仕入れ値段が5シリング8ペンスであったという。どう考えても彼が仕入れ値段でそのまま販売するとは思えないから、厳密に言えばこれも「ずる」と言えようか。ちなみに、このやり取りの行われる章には「グレッグ伯母はボブの親指の幅を知る」というユーモラスなタイトルが付けられている。ここで言う「親指の幅」とは、実際にボブがずるをして布の長さをごまかした、というより彼の口のうまさ、つまり商人としての才覚をさしていると見るべきであろうか。

親指の「ずる」は明らかに物質的な計量可能な意味での「ずる」である。これに対して口先での「ずる」は、時代背景を考えれば、売り手と買い手の間のやり取りの一環としての、いわば正常な売買行為の一部としてとらえられるべきものであろう。どちらも相手が正直にすべてを語っていないことを承知の上で、ぎりぎりの線まで交渉する。それは今日でも定価販売ということをしなない売買においては一般に見られることである。

もちろん、このボブとグレッグ夫人とのやり取りの場面は、ボブのずるさを示すというよりも、グレッグ夫人という、頑固でしっかり者の女性でも、少し欲を出してしまうとまんまとボブの口車に乗せられてしまう、という人間的弱さと、ボブの商売のうまさとの対比をユーモラスに見せるのが主眼となっている場面である。(また、後にマギーが窮地に陥ったとき、思いがけずグレッグ夫人がマギーを助けようとする意外さを際立たせるための伏線とも読めるだろう。)

だが、ここで確認しておきたいのは、ボブがトムに持ってきた投資話では、ボブはトムの金をだまし取ろうなどとは決して考えていないという点である。「けちんぼう婆さんども」を相手に「でっかい親指でずるいことする」ボブと、幼なじみの苦境を見て金貨を差し出したり、金もうけの手伝いをしてやろうというボブとはまったく別の人格であるかのようなのである。そこには、職業と個人的生活との明確な分離がある。彼にとって金もうけは社会生活でもあり、人生の一部でもあるが、それを律する倫理は友人を相手にする場合と、普通の顧客を相手にする場合ではまったく異なる。そうした使い分けができる精神構造が彼の特質である。それは、「ごだわりなく満足していける無学なボブ」(381)であるからこそと言えようが、またそうした経済倫理観は近代社会の産業化の発展にともない職場と家庭、労働と私生活とが分離してゆく時代の産物とも言えよう。

#### IV

ここでエリオットの別の作品の登場人物を少し見てみよう。『アダム・ビード』(1859)で主人公のアダムは大工として物理的に物を製作するという点では、流通業に従事するボブと違って、価値の創造という行為にもっとも近い労働者である。しかし、彼の職場の同僚はすでに近代の賃金労働者としての性格を持ち、就業時間終了とともに職場を去ろうとして勤勉なアダムの怒りを買う。

「俺は、時計がまだ打ち終わらないうちから、まるで銃で撃たれてもしたみたいにあっさり手を下ろしてしまうのを見るのは大嫌いだ。まるで、仕事に誇りも喜びもこれっぽっちもない、と言わんばかりじゃないか」<sup>6)</sup>

アダムは親方に雇われている人間であり、自分の仕事ですべて収入に結びつくわけではないのにもかかわらず、たとえ勤務時間が終了しても作業の途中で仕事をやめることをよしとしない。賃金労働者であるにもかかわらず、大工としての労働がそのまま彼の精神や肉体の健全さと融合していて、そこには職業と個人生活の間の乖離は見られない。同じ賃金労働者である同僚達の態度と比較すると、もうすでに古いタイプの労働者となりつつある人間である。しかしまた、労働者として働き、ものを作ることに喜びと誇りを見いだす宗教的精神性に支えられたこうした勤勉さこそが、ヴェーバーが示したような「プロテスタンティズムの倫理」として、近代資本主義を生み出す源となったと考えることもできよう。

『サイラス・マーナー』(1861)では、一人村外れで機織りをしているサイラス・マーナーは、職業が生活の精神的中心となっているという点ではある程度アダムに似る。また、彼も自らの手で目に見える物を作りだしているという点でもアダムと同様であり、ボブとは異なっている。しかし、彼は単に労働を喜びとするのではなく、労働の反復単純性による精神的麻痺状態を、共同体や過去からの精神的逃避として求めているのである。さらに、彼は金貨を蓄える。しかし、それは富の蓄積による経済的効用、つまり家族を持ったり、安寧な生活をしたり、それを元手に投資するなどが目的ではなく、金貨は愛玩の対象となり物神化されている。貨幣はその基本的機能の一つである、交換を媒介する機能を抑制され、死蔵される。サイラスの経済活動は発展的可能性を持たない。やがて彼の貨幣はそっくり奪われ姿を消す。そして、失われた金貨に入れ替わるように迷い込んできた幼子エビーを養育していくことが彼の投資となる。<sup>7)</sup>

次に『ミドルマーチ』(1871-72)の医師リドゲイトは、自らの私生活においてもその職業上の科学的な目をもって観察し、生きていくことができると思いこみ、失敗する。フランスでの女優への恋の幻滅の後で、彼は「今後は女性を厳密に科学的な見地から見て」<sup>8)</sup>生きてゆこうと考える。しかしこの若い医師は田舎町の美しい娘ロザモンドの魅力に惑わされ、彼女の自己中心性や虚栄心を見抜けずに、不幸な結婚生活をおくることになる。

また、病院のチャプレン選出の際には、医師であり科学者である自分がそうした政治的紛争の場に身を置かねばならないことに疑問を感じつつも、人間関係を逃れられず、自分の意志に反した票を投ずることになる。

結局妻の虚栄心から来た経済的困難や患者の不自然な死をきっかけにミドルマーチを去った彼は、科学的探求心を捨て、金持ちを相手にして成功した世俗的医師として若死にする。こうして、女性を科学的に見る、という決意を彼は私生活上において遂行できなかったし、また自らの職業として選択した科学者として生きる道を、家庭内での経済的必要から放棄せざるをえなかった。こうした、職場と家庭との分裂をJ. P. ブラウンは、「二重生活」と呼び、「この二重生活の主因をなすのは、仕事と家庭、知性と感情、男性と女性との間の分裂である。『ミドルマーチ』の世界は総じて、このような分裂を認めようとしながゆえに生ずる結婚生活と職業との葛藤を中心として構成されているのである」<sup>9)</sup>と述べている。リドゲイトは医師として、医療という場で健康の回復や科学的発見という価値の創造行為に従事していた。しかし、彼の問題は、その創造の喜びは私生活の場において妻が共有できるようなタイプの喜びではないということである。高度な専門職であるからなおさらであろうが、ここにはアダムやサイラスの場合のような意味での仕事と生活との一体化は失われている。<sup>10)</sup>

## V

さて、『フロス河の水車場』に戻って水車場の経営者タリヴァー氏を見てみよう。彼は古いタイプの経済人である。彼の職場である水車場は物理的にそのまま家庭に直結しているし、精神的にもその経営と家庭生活は分離していない。返さなくてもよい借金を返す羽目になり、そのためにも別の借金を背負う羽目になったのも、彼が妻の親戚に対する対抗心やプライドを捨てきれなかったためである。<sup>11)</sup>またそのプライドが彼を水車場をめぐる裁判ざたに駆り立て、破滅へと追いやった。個人的感情と経済活動とを分離できずに、結果的に経営にも家庭生活にも支障をきたすことになったのである。またトムは父親タリヴァー氏の虚栄心から、水車場の経営者の息子としてはまったくふさわしくないタイプの教育を受ける。ステリング氏の学校で彼が教わったものは、ラテン語や幾何である。その不適切さは、トムが父の破産の後に叔父ディーン氏のところに行ったときに、残酷なまでの単

純明快さで指摘されることになる。苦勞して働き学んで地位を築き上げた叔父は、職を求めてきた世間知らずの若者にこう語る。「しかし、わしはありのままの話をしよう。おまえのお父っあんは、気の毒だが、道をとっちがえて、おまえに教育をうけさせようとなつとめたんだ」ラテン語や幾何は「一生小切手に署名することしかししない」(314)人間こそが学ぶものである、と彼は言う。そしてトムが、どうしてラテン語がいけないのかと尋ねると、彼はこう答える。「おまえは何を知っているというんだい？ それから、なみの店員の知っている程度のそろばんもわかっていない。世の中で成功するつもりなら、ほんとに、梯子のいちばん下の段から始めなきゃならん」(315)。

タリヴァー氏はトムをステリング氏の学校にやると決めたときにこう言っていた。「つまりそれが投資なんですよ。トムの教育は、それにかけただけが、あの子の資本になりますからなあ」(129)。彼は息子を自分より少し上の社会階級に上らせようとした。「年に正味100ポンド」(129)かかる教育を3年間続けたのであるから、合計300ポンドほどかかったのであろうか。後年の破産後のタリヴァー氏の借金は約500ポンドである。その借金をまだ返せないでいた時の彼は、あるとき貯金箱の中の193ポンドの金を指して「これだけの金を貯めるんだって4年かかった」(454)と嘆く。それに比べると、いくら破産前とは言え、トムにかけた年額100ポンドは大変な金額である。そして、ディーン氏の指摘するように、トムに対して行われた教育は投資としてまったく失敗であった。仮に彼の父が破産しなかったとしても、トムはその受けた古典的教育を生かす職業に就くことができたであろうか。彼は「一生小切手に署名することしかししない」(314)階級の人間ではないから、仮に父の職場を受け継がなかったとしても、いずれは何かの職業に従事せねばならなかったであろう。そうした際に彼の受けた教育がそのまま彼を有能な職業人としたかは疑問の残るところである。この点について、アシュトン「物語の道筋を不幸なものにすることに集中したため、ジョージ・エリオットはどんな教育がトムにとって適切なものであったらどうかという問題には答えていない」と考える。<sup>12)</sup>

結局トムはディーン氏に仕事をもらい、夜学に通って簿記を習うことになる。そして大変な苦勞の揚げ句に会社から認められ、さらにボブの投資話という大きな助けもあって、父の借金を返せるまでの金を貯めることがで

きる。しかし、トムの受けた古典的教育が彼の勤勉さを育てたというよりは、父親思いで負けず嫌いの性格がそうした努力を生み出したという面が大きいのではないだろうか。こうしてタリヴァー氏は、経済的効用を考慮して進めるべき水車場の経営や息子の教育と、個人的感情である自分の見えやプライドなどを混同した。その結果として破産や、息子への教育という投資の失敗という結果が生じたのである。

## VI

父親が自分への教育という形で行って失敗した投資行為を、息子のトムが別の形で成功させる。彼はボブに誘われて外国へ品物を輸出する資金を出し、大きな利益を得て、その金で父親の借金を予想よりもはるかに早く返せることになる。もし投資からの利益がなかったとしたら、彼が働いて得た給料だけでは返済をそれほど早く済ませることは到底できなかつたはずである。しかし、自明のこととしてボブは十分説明していないが、その投資はリスクを含んでいた。それを指摘するのはタリヴァー氏である。投資を持ちかける息子に彼はこう答える。「だが、おまえはその金をすってしまうかもしれない——わしの生きてゆく一年分を無くしてしまうかもしれない」(409)。だが、トムは失敗を恐れずに投資し成功する。

このときトムはゲスト商会で働く単なる事務員としての賃金労働の場から、資金を投資して利潤を得る、いわば金融業の世界へと足を踏み入れたのである。ここでは、上述のアダムやサイラスの世界と違い、品物を生産する必要はない。商品を何らかの形で移動することで、価格の差を生じさせ、それを利潤とするのである。ボブが「ちょっとした荷」(408)と言うだけで具体的な商品名を口にしないのも、その必要はないからである。それは、大工アダムや機織り職人サイラスが誇りを持って、あるいは過去を忘れようと一心不乱に働いて作り上げる品物ではなく、ただ単に投資の対象であり金もうけの手段である商品にすぎない。こうして、トムの経済活動は、生産の場から離れ、他人の作り出した商品を流通させてそこに投機的投資を行うという、近代資本主義にふさわしい形態をとる。

ここでマギーの場合について考えてみよう。この物語のヒロインである彼女は、経済活動という面から考察したときには、負の意味の重要性しか持ち得ない存在となる。彼女が金銭的報酬を伴う生産的活動に携わる場面は

ごくわずか、破産後の家庭内での裁縫、父の死後のある学校での2年間の教師としての勤務、そしてスティーンとの事件の後のケン博士の家での住み込みの家庭教師の3つである。そもそも彼女は、父親の破産前は中産階級の女性として働く必要はなく、また働くことは体面にかかわることもあった。破産後の家庭の経済的困窮に面したとき彼女は働こうとする。しかし、裁縫の仕事をしようとリンネル商人に注文をもらいに行こうとまでした妹をトムはとがめる。「僕は自分の妹にそんなことをしてもらいたかない、君がそんなことをしてまで身をおとさなくても、僕は借金を払うだけのことはするつもりだ」(386)。彼にとって女性は働くべきものではなく、また、妹が働くことは彼の男性としてのプライドを傷つけることだった。しかしとにかくマギーは裁縫の仕事で細々とした手間賃を稼ぐ。それに対して、兄のトムは事務所での勤務と、ボブの誘いで始めた投資とでかなりの金を蓄え、予想外の短い年月で父の借金を返すまでになる。

マギーがフィリップと密会しているのを発見したとき、トムはこう言って妹をとがめる。

「父さんが生きているうちに安心させてあげたいと思って、僕が努力して働いているのに——僕ら一家の名誉を回復しようとして働いているのに——君が精いっぱいしてきたことといたら、そのどちらをも覆そうというんだ」(445-446)。

フィリップとの密会の件は別として、家計への経済的貢献ということで言えば、トムが自らを十分評価するのに対して、マギーの裁縫はまったく言及すらされない。エルマースは次のように主張する。この作品の世界では

人は男性であるか、男性でないか、のどちらかである。そして、まともな女性となる方法が存在するのかもしれないが、より深い意味においては、男性でないということは、すなわち何か重大な点で間違っているか劣っている、ということの意味しているのだ。<sup>13)</sup>

さらにまた、ノーベリーの以下のような意見もある。

この保守的かつ利潤中心の社会においては、男性

は女性を劣等な生物と見なすだけではない。男性は女性を経済的観点から見る。つまり、たとえば結婚は営利にかかわる行為である、特に財産を持っているものにとっては。<sup>14)</sup>

ノーベリーの指摘するように、トリヴェー氏は娘マギーがまだ幼かったころ、彼女に関してこう言っている。

「女としたら、はしっこすぎるかもしれぬ。[中略]子供のうちはそれでもたいしたまちがいはない。しかし、おとなになってからはしっこすぎるのは、羊の尻尾の長いのと一緒におもしろくないことだ——りこうだからといっていい値がつくものではないからな」(60)。

こうしてマギーは、自らは経済的行為を行うことが事実上不可能であるにもかかわらず、男性からは適齢期の女性として、いわゆる「結婚市場」における価格を持った存在として見なされる。トムは、その男性中心的思考において伝統的な家父長制的社会を代表し、また賃労働や投資というその経済活動においては、新たに発展しつつある資本主義社会を示す存在である。マギーはその両方の世界において、自らの持てる力を生かす道を閉ざされている。

ボブの場合はどうだろうか。生産手段や技術を持たないボブは、賃金労働者として他人に雇用されるしかない存在である。しかし彼はたまたま火事を消して礼金を手に入れ、それを元手にして自営業者として行商、つまり流通業に従事することができた。ボブの資金は投資される。それは最初は行商用の布を仕入れるのに用いられ、さらには貿易への投資へと発展する。彼が布をはかりながら親指を物差しに当てるとき、彼は親指の幅の分だけ資本を増大させているのである。彼は生産の場に直接かわからない。彼は他人の生産物の交換を媒介し、さらにそれに投資して、資金を増大させようと試みる。そうした意味で、彼はもっとも近代資本主義を代表する存在である。また、近代資本主義が主に製造業にかかわる産業資本が成長して行く時代であるとしたら、彼の従事する流通と投資は、物の姿が見えずにただ資金だけが増殖していくという、さらにより現代的な資本のあり方を示しているときえ言えるだろう。

ボブの親指は「人間と猿との差別を示すもの」(377)

と紹介されていたが、それはまた、生産に直接たずさわ  
るアダムやサイラスのような労働者と、ボブやトムのよ  
うな、資金を投資して増大させる金融資本家（の萌芽）  
との差異を示し、来るべき時代の姿を指し示すもので  
あろう。エリオットは本作品で、マギーという孤独な魂  
と「息も詰まるような偏狭な」社会（363）とのぶつかり  
合いというテーマを切実に提起すると同時にまた、近  
代資本主義の発展の過程の一端をも描き出していると言  
えよう。

注

本論は平成13年度東京家政大学海外研修派遣の成果の  
一部である。

- 1) Barbara Hardy, *Particularities: Readings in George Eliot*, Athens, Ohio: Ohio University Press, 1982, p. 67 参照。
- 2) Alan Mintz, *George Eliot and the Novel of Vocation*, Cambridge, MA: Harvard U.P., 1978, p. 4.
- 3) *The Mill on the Floss*, 1860, ed. A. S. Byatt, Harmondsworth: Penguin, 1979, p. 100. 以下本書からの引用は（ ）内にページ数のみ示す。なお訳文は工藤好美、淀川郁子訳（『ジョージ・エリオット』世界文学体系85 筑摩書房 1965年所収）を使わせていただいた。
- 4) これは同じような労働を行ったもう一人の少年を思い出させる。トマス・ハーディの『日陰者ジュード』（1895）では、幼いジュードはボブとは違って、その仕事をまともにこなすことができなかった。彼は「食べな、それじゃ、小鳥さんたち、いっぱい食べなよ」（Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, 1896, London: Macmillan, 1974, p. 34.）と、カラスに麦を食べさせてしまい、そこを雇い主に見つかって一日6ペンスの仕事を失う。これは幼年時代のエピソードながらも、この少年が社会性を持った活動と個人的感情とを分離することのできない人間であることを示し、その後の彼の人生の困難を暗示するものとなっている。
- 5) オールティックの言うように「商業は社会的に汚名を着せられた職業であった」（Richard D. Altick, *Victorian People and Ideas: A Companion for the Modern Reader of Victorian Literature*, New York: Norton, 1973, p. 32.）。その汚名は、エリオットの作品の舞台設定の時代から約半世紀後においても依然として残っており、たとえば、ゴールズワージーの『財産家』（ストーリーは1886年に舞台設定されている）で主要登場人物の一人の老ジョリオンは、ばく大な財産を持つ上層中産階級の人間でありながらも、「商人」である owing to his being “in trade” ということを理由に、ロンドンのあるクラブへの入会を断られている。（John Galsworthy, *The Man of Property*, 1906, London: Penguin, 2001, p. 33.）
- 6) *Adam Bede*, 1859, ed. by Stephen Gill, Harmondsworth: Penguin, 1980, p. 55.
- 7) 谷田恵司「『サイラス・マーナー』における貨幣と病」『ジョージ・エリオット研究』第4号（2002年）参照。
- 8) *Middlemarch*, 1871-72, ed. W. J. Harvey, Harmondsworth, Penguin, 1965, p. 183.
- 9) J. P. ブラウン『十九世紀イギリスの小説と社会事情』松村昌家訳 英宝社 1987年 114頁。
- 10) なお、『フェリックス・ホルルト』（1866）のフェリックスはここでは取り上げない。確かに彼は賃金労働者であるが、彼の説くところは、労働者の権利の拡大には労働者の精神的・知的向上が伴わなければならないとするものである。ハンドリーが述べているように、彼は作者の「経験から生まれたというよりは、想像力で生み出された登場人物である」（Graham Handley, *George Eliot's Midland: Passion in Exile*, London: Allison and Busby, 1991, p. 200.）彼は真の意味での労働者というよりも、紳士階級の精神を持った労働者としてエリオットが作り上げた人間像であり、ボブらとの比較の対象としてはリアリティを欠くと思われる。
- 11) ちなみに、作品中ではタリヴァー家のみならず、彼の妹夫婦やタリヴァー夫人の姉たちの家の経済状態に関しても、実に綿密な情報が示されている。
- 12) Rosemary Ashton, *The Mill on the Floss: A Natural History*, Boston: Twayne, 1990, p. 101.
- 13) Elizabeth Ermarth, “Maggie Tulliver's Long Suicide,” *Studies in English Literature 1500-1900*, 14 (1974), pp. 588-89.



- 14) Barbro Almqvist Norbelie, "Oppressive Narrowness": *A Study of the Female Community in George Eliot's Early Writings*, Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1992, p. 116.

### Abstract

The conflict between the individual and society is an important and familiar theme in discussions of George Eliot's work. This paper examines how this critical conflict manifests itself in less chartered areas of *The Mill on the Floss*, focusing on characters such as Bob Jakin, Tom, and Mr Tulliver to reveal how the dialectical tensions of private and public spheres are negotiated through the medium of money. Through close scrutiny of how the relationship between individual passions and economic activities contribute in a unique way to the thematic structure of this novel, the paper will illustrate Eliot's concerns regarding the emergence of a capitalist society.